

「研修会等名称」 第9回FDフォーラム・第1回高大連携教育フォーラム

「生徒が学生に成長するために」

場所：龍谷大学、キャンパスプラザ京都

期間：2004.2.28・29

1. 研修の内容

[第1日]

特別講演「教育の壁を越えて」北里大学養老孟司氏

シンポジウム「教育の連続性と学びの多様性について」

堀川高校荒瀬克己氏、京都工芸繊維大学左巻健男氏、和田中学藤原和博氏

連続性について様々な見解が示された。

(養老氏)

真理(普遍性)探求の連続性、知と体との連続性、不変な言葉(情報)をもって普遍性を伝達する連続性。価値観の断絶のない連続性。わからないですませない連続性。

(荒瀬氏)

- ・ 受けとる力、考える力、判断する力、表現する力及び交渉する力の連続性に向けた教育
- ・ 中学、高校、大学、社会へつながる連続性に配慮する連続性

(左巻氏)

- ・ 指導ではなく、支援による学生自主性の連続性
- ・ 断片的な知識ではなく、知識を使いこなす連続性(藤原氏によれば、知識を技術へ変換する連続性、情報処理(A)と情報編成(B)の重点の置き方に関する藤原氏イメージ：小学(A)9:(B)1、中学(A)7~8:(B)2~3、高校(A)5:(B)5、大学(A)0:(B)10)

(藤原氏)

- ・ 世の中のバーチャルではなく本物の風を学校に入れることによる社会と学校の連続性(教えることと現実の連続性)

[第2日]

第3分科会「新学習指導要項と大学での学び、自然科学系教育を中心として」

報告者：北野高校堀部正之氏 代々木ゼミナール表野哲氏、京都府立大学石田昭人氏

(堀部氏)

- ・ わが国では「理解」、次に「解く」であるが、欧米では「理解」と「解く」が平行。
- ・ 教育において、具体的にものに触れることと、思考錯誤を重視する。(石田氏によれば、顕微鏡を介して理科の動機づけがなされる場合がある)

(表野氏)

- ・ 統計上は、文系に比べて理系の人気は落ちていない。しかしながら、理系への関心は高まらない。(理系を志望する理由が重視されていない)

(石田氏)

- ・ 学際性の連続性により、知的好奇心を実際に与え、現実を体験させる動機づけ、及び機会の提供が重要である。
- ・ 学生の多くは、専門性を深めることには関心がない。学者になりたい人間は少数である。従って、知識の豊富さよりも現実・社会・人生への適応に興味をもっている。

- ・ 学、 学、 論のようなタイトルで、絞切り型に定義から始める授業では学生はついてこない。疑問形のタイトルで始め、この疑問をとく複数の学問の関係を念頭におきながら、同時に進め、最後に、「この授業で諸君は、 学、 学、 論を勉強したのだよ」という言葉で終了できる授業が良い。
- ・ 理系に知的好奇心はむしろ理系よりも文系の学生によって高まる。従って、文系はけして理系が嫌いではない。むしろ、理系の理系離れ現象がおこるなど理系の理系嫌いは以外と多い。

第 11 分科会「地域連携と FD 活動」

報告者：華頂短期大学千原美重子氏、滋賀文化短期大学山田容氏、
京都橘女子大学井口貢氏

いづれも地域に根ざした事例紹介であり、情報の普遍化は難しかった。

ただし、山田氏から、大学の新たな役割として、地縁のない人々（滋賀県は近畿地方のサラリーマンのベットタウン化しており、リタイアした人々が多くなっている）に対する支援（場と機会の媒介）の指摘がなされた。

2．研修の成果

新聞等マスコミを介するのではなく、バーチャルな事例ではなく、等身大の本物に接する経験、緊張感（養老氏のいう「体」で感じる）により、知識への動機づけをはかることが重要であることの示唆を多くの発表からえた。

また、学生はバーチャルではなく、本物を求めており、上記に強く反応している事実も確認できた。

3．授業への研修成果の反映状況

フィールドワークなど授業の場を外に向けている傾向は好ましい。この場合、本物を選別することが鍵であると考えた。さらに、インターンシップを活用する等検討課題もある。

また、断片的な知識の詰め込みではなく、学際的に体全体に知識を浸透させることが重要と考えた。このためには、知識の item 数を減らし、使いこなせない item をやめることも必要と考えた。

学 部 長	F D 委員 長	F D 委員 会	総 合 企 画 課 長	係